

ても、父と兄は何処で戦っているのか消息はわからない。ある日暮時、突然兄が訪ねて来た。最初は戦場から逃げて来たのかと母は家の中に入れず、垣根の内と外とで話をしていたが、高田方面の戦に敗れ、明日未明にお城に入り戦う事になつてゐるとの話と、この家の主人の取りなしで、やつと皆に逢う事が出来た。

イネは兄に逢えた事がどんなに嬉しかつたか。大人達は一晩中語り合ひ、まだ暗い中兄は出て行つた。やがて会津藩は降服し、その後色々あつたらしいが、ただ一つ兄の後日談として、暗い中大川を泳ぎ渡りお城に向かつたが、途中敵兵が彼方此方にいるので、

五、六人の隊士で或るお堂に入つた。するとお堂の下から女のひそひ声がして「もし会津藩の方と思ひますが」というので「そうだ」と答えたら「戦況はどうでしようか」と聞くので「よくなく吾々も未明に入城し籠城して戦つつもりだ」というと「御武運を祈ります」と話は絶えた。朝早く出発の時お堂の下をのぞいてみたら、十七、十八才の武家の娘ばかり七、八人抜きで膝を固くしばり、懐剣で左胸の乳の下を突き声も立てずに見事に自害していたとの兄の話だつた。

敵の恥しめを受けぬ様に、又武士の足手まといにならない様にとの本当に会津武士の娘達だつたが、この事はあまり人に知られていないしそれが何処のお堂とも私も聞いていないと祖母イネは残念がつていた。そのお堂は一体何処なのだろう。私はその事も知るのも目的で会津大学に入った。会津の事や戊辰戦争の話の時には、必ず出席して、講師の先生にお尋ねしたが、「わからない」とおっしゃる先生。「又そんな事実はない」と断言される先生。「おばんちや、又今日も駄目だつた」と実家の方に向かつて報告する私。しかし遂に平成六年高田大学の会津に関する講師だった宮崎十三八先生の時、担当の三本松先

生のお許しをいただいてお聞きしたら、「集団自決は門田の一族と、それから西若松駅の東側の少し入つたお堂だよ」と事もなげにおつしやつた。私は本当に驚いた。

七十五年前、会津高等女学校一年生の時、汽車通学をしていたが、通学路から少しこじ入つた藪の中にボロボロの障子の古いお堂があつた。「先生、昔ボロボロの障子の」と聞いたら「そうだ。今は家が周りに建つてね」とお話を、祖母が死んで五十二年でやつと念願が果たせた、祖母との約束が。私は胸が一ぱいになつて、先生にお礼を言つて家に帰る途中涙がこぼれた。先生に後光がさした様な有難さだつた。ところが間もなく先生が亡くなられた事を知つて、とても驚くと共に悲しく殘念だつた。もつともつと祖母から聞いていた事が沢山あつたのを確かめたい思いもあつたのである。

戊辰戦争で幕府の直轄地の上戸原にあつた私の実家でおきた話での、長州兵の略奪や暴行のすごさに、大事なものをそつと隠そうとした若い奉公人が切り殺された。それを物陰からのぞいてみていた祖父秀吾の弟良吾十一才と妹おりよう十三才が、息子や孫に語り伝えている。そのお堂は一体何処なのだろう。私はその事も知るのも目的で一徹者だつた祖父福田彦九郎が抗議でもしたのだろう。隊長のいる赤留村に行く街道より少し右に入つた草原で通称馬づくらいの場（馬の蹄鉄をはめる場所）に引立てられ、殺される事になつた時、後からついて行つた曾祖母ヒテが隊長の前に進み出て「この者は、他家の生まれ私の家に入つた者、全部の責任はこの家に生まれた私にあります。私を切つて下さい」と言つたら「さすが肝煎の家に生れた女だ。お前に免じて許してやる」と言われ彦九郎は助かつたという。